

株主メモ

決算期日 毎年3月31日
定時株主総会 毎年6月
上記基準日 毎年3月31日
その他必要あるときは、
あらかじめ公告して
臨時に基準日を定めます。

配当金受領株主確定日 利益配当金 ―― 3月31日
中間配当金 ―― 9月30日

1単元の株式数 100株
公告掲載新聞 日本経済新聞
名義書換代理人 〒100-8212
東京都千代田区丸の内一丁目4番5号
三菱信託銀行株式会社

同事務取扱場所 〒100-8212
東京都千代田区丸の内一丁目4番5号
三菱信託銀行株式会社 証券代行部

(連絡先)
(郵便物送付先) 〒171-8508
東京都豊島区西池袋一丁目7番7号
三菱信託銀行株式会社 証券代行部
電話 0120-707-696
(フリーダイヤル)

同取次所 三菱信託銀行株式会社 全国各支店

配当金のお受け取りは便利な口座振込で

(「郵便貯金口座振込」も可能です)

当社の配当金のお受け取りは、口座振込が便利です。
銀行等預金口座および郵便貯金口座への振込は、
■**確実**……お受け取りのお忘れがありません。
■**安全**……ご指定の口座に振り込みます。
■**迅速**……支払開始日に口座から引き出しが出来ます。
なお、手続き方法につきましては、
三菱信託銀行証券代行部までお問い合わせください。

決算公告のホームページのご案内

当社の決算公告は、定款紙による決算公告に代えて、貸借対照表および損益計算書を下記のアドレスに掲載しております。

<http://www.aspir.co.jp/kessan/6868/6868.html>

お問い合わせは、03-3962-3468 迄お願い致します。

(当社IR室)

TCL Tokyo Cathode Laboratory

To Be The Only One Company.

JASDAQ
証券コード：6868

株主のみなさまへ

2006年3月期 第1四半期 2005.4.1 — 2005.6.30

URL <http://www.tclab.co.jp>



「リンドウ」

リンドウ科リンドウ属の植物。根が胆汁のように苦い事から“竜胆”と漢字で書きますが、植物名はその読みがなまって変化したといわれています。日本古来から愛され、秋に根を伸ばし釣鐘型のきれいな花を上に向けて咲かせます。花色は紫が多いのですが、桃や白もあります。



R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH SOY INK

この報告書は、環境に優しい大豆油インキを使用して印刷しています。

TCL 株式会社 **東京カソード研究所**
“MICRO TECHNOLOGY OF DISPLAY & SEMICONDUCTOR”

2006年3月期

第1四半期 連結決算の概要をお知らせします。

【第1四半期の概況】

当第1四半期におけるわが国経済は、原油、素材価格の上昇、国際テロなど不安材料を残しながらも、企業収益の改善や設備投資の増加を軸に、雇用・個人消費の改善も見られるなど、緩やかな回復基調で推移いたしました。

電気・電子業界におきましては、国内およびアジア市場の半導体設備投資が昨年末より好調に推移しております。このような状況のもと、当社グループは、市場ニーズを的確に捉えた製品の開発による積極的な販売活動と品質改善・原価低減活動を推進してまいりました。

この結果、当第1四半期連結会計期間の当社グループ業績につきましては、売上高は2,883百万円、前年同期に比べ630百万円(28.0%)の増加、営業利益は99百万円、前年同期に比べ61百万円(162.3%)の増加、経常利益は91百万円、前年同期に比べ50百万円(124.0%)の増加、第1四半期純利益は31百万円、前年同期に比べ6百万円(16.5%)の減少となり、おおむね当初の見込み通りの結果となりました。

【2006年3月期の予想】

(単位：百万円)

● 連結	中間期	通期
売上高	5,800	13,000
経常利益	330	1,050
当期(中間)純利益	183	580

(注) 業績予想につきましては、現段階の入手可能な情報による判断および仮定に基づいて算定しておりますが、予想に内在する不確定要因や、今後の事業運営における状況の変化等により、実際の売上高および利益は上記に記載した予想数値と大きく異なる場合がありますことをご了承ください。

【収益】

(単位：百万円)

● 連結	当第1四半期 3ヶ月決算	前第1四半期 3ヶ月決算	前 期
売上高	2,883	2,252	11,583
電子部品事業	851	610	2,832
プローブカード事業	1,211	1,352	5,571
装置事業	819	290	3,180
営業利益	99	37	883
経常利益	91	40	734
四半期(当期)純利益	31	38	346
単体売上高	2,499	1,930	9,901

【財務】

(単位：百万円)

● 連結	当第1四半期 (2005年6月末現在)	前期末 (参考)
総資産	15,980	15,505
株主資本	7,469	7,404
株主資本比率(%)	46.7	47.8
1株当たり株主資本(円)	1,397.42	1,401.78

*公認会計士による監査は受けておりません。

株主のみなさまへ

Top Message

TCLは今期から56年目に入りました。 その第一歩となる第1四半期は 売上高28億8,300万円(前年同期比28.0%増)を 記録、新たな節目の年に向かって順調に始動しました。

株主のみなさまにおかれましてはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

ここに「TCL通信Vol.7」(2006年3月期第1四半期号)をお届けいたします。

はじめに当該四半期の業績をご報告いたします。当第1四半期の連結業績は、売上高2,883百万円(前年同期比28.0%増)、営業利益99百万円、経常利益91百万円、第1四半期純利益31百万円となり、概ね当初の予定通りの結果となりました。



代表取締役社長

大久保 利次郎

バックライト用モリブデン電極のアッセンブリ 製品の出荷が本格化します。— 電子部品

電子部品関係ではパーツ単体の販売と比べ、付加価値が高いため売上への貢献も大きく期待されていたアッセンブリ製品の出荷がよいよ本格化します。このTCL通信でも何度かお伝えしていましたが、慎重な性能評価によって時間を要し、出荷が遅延してまいりました。しかしながら厳しい評価にも無事に合格し、当第1四半期の6月には月間20万個の出荷を記録しました。これは今後も順調に推移していくと予想され、12月には月間200万個の出荷数となる見通しです。

当第1四半期はほぼ計画通りに推移。 下期には大きな伸びが期待できます。— 装置

装置関係についてはほぼ計画通りの数字を達成することができました。しかしながら7月からの第2四半期については、いわゆる端境期ということで、当初の計画を達成するためには厳しい環境となりますが、全社一丸となって努力し困難な時期を乗り越えていく所存です。また、年末にかけての下期は例年同様に増加を見込んでおります。その意味では第1および特に第2四半期の動きも、厳しくはありますが織り込み済みのことと考えております。

半導体市場の底打ち感を反映して、 順調な回復を見せています。— プローブカード

今年の1～3月頃に行われたメーカーの在庫調整の影響がかなり大きかったため、当初はかなり苦戦すると予想していたプローブカードですが、順調な回復基調にあります。3月頃には市場全体に調整の底打ち感が出てきたことで、4、5月についてはまだ鈍い動きでしたが6月に入って急速に回復してまいりました。この動きは年末商戦に向けた液晶パネルの増産に引っ張られる形で、7月以降も持続していくものと予想しています。ただしその後訪れるであろう生産調整の動きには十分注意していきたいと考えております。

モリブデン電極関係の売上の大幅な拡大に 期待しています。

冒頭でもお話ししましたが、いよいよモリブデン電極のアッセンブリ製品の出荷が本格化します。単体パーツとしてはすでに主力製品として評価を頂いているモリブデン電

極ですが、アッセンブリ製品（溶接品）の出荷が待たれていました。正確には子会社を通じてすでに出荷は始まっていたわけですが、今回TCL本体からの出荷が開始され、これに加わります。そして年末に向けた液晶パネルの大増産を控えて、さらなる出荷数の増大が期待されます。近い将来にはグループ全体での出荷数の合計が、月間1,000万個の大台に乗ることも予想され、そのための生産体制の強化にも努めてまいりたいと考えております。

時間をかけて慎重な性能評価をパスしたことで、 製品の信頼性には自信があります。

モリブデン電極は、従来のニッケル電極に較べて輝度や寿命の点で優れています。出荷が遅れていた原因はひとつにはこの寿命をチェックするための耐久性テストにあります。例えばバックライトの寿命を60,000時間としてテストを行おうとすると、1年が24時間×365日で8,760時間ですから、7年近くかかります。これを加速試験という方法で短縮するのですが、それでも半年ぐらいの時間がかかってしまい、途中で仕様変更などがあると評価に要する時間がどんどん延びていってしまいます。

メーカー側も製品を組み立てた後に部品に不良が見つかるということは莫大な損失につながりますから、基準は非常に厳しくなります。しかし逆に言えばさまざまなメーカーのこういった厳しいテストに合格する製品を開発することで、当社の製品の信頼性が証明されるとともに、当社の研究開発や製造部門のスキルアップにもつながることとして、非常に重要なことと考えています。また、国内をはじめ韓国など海外の新しいメーカーに採用されるためにも、こういった実績づくりが重要なポイントとなっています。

需要の予測とそれにとりま 生産量の調整が重要になっています。

市場の要求がさらに明るくさらに長寿命ということで、液晶テレビやテレビ機能付パソコンモニタなどを中心にニッケル電極からモリブデン電極へのシフトが進んでいくと予想されます。幸い現状ではモリブデンの供給や価格は比較的落ちついていますので、生産も順調に伸ばせると思っています。また従来2.7φが主流だったバックライトのランプが最近1.7φのものにシフトしています。これは細い径の方が発光効率が良いということで、径が細くなるということは電極も小さくなり、高価なモリブデンの材料比率も低くなるため今後の収益率の向上には良い影響を与えるものと考えられます。

また液晶テレビに関して言えば、購買の主流がより大型機種へとシフトしているのも好材料です。これにより1台のテレビに使われるバックライトの数が増えます。大きな流れでは2011年の地上波完全デジタル化の動きもあり、これに備えて今後はデジタル放送対応テレビへの買い替え需要が加速すると思われるのですが、ここでCRTから液晶を中心としたFPDへの最終的なシフトが行われると見ています。

新製品の開発や、新たな業界との お付き合いも積極的に進めてまいります。

現状ではモリブデン電極を取り巻く市場環境は安定しておりますが、そのような状態に安住するということは停滞を意味します。当社では常に技術革新を念頭に置いて、現状の製品に対する改良や次世代を担う新製品の開発に努力しております。モリブデン電極に関しましても常に“オン

リーワン”を追究していくという基本姿勢のもと、現状の製品の絶え間ない改良はもとより、これに変わる次世代技術の開発を積極的に進めております。

新技術の開発に関しては、韓国のメーカーとの信頼関係や具体的な技術協力が非常に重要となっています。私どもの韓国のグループ会社であるマイクロハイテックなどでも、現地の優れた技術や装置など、良いモノは良いカタチで積極的に受け入れています。さらにビジネスのスピードが速く、古い観念にとらわれず新しいものをどんどん積極的に取り入れていく姿勢は、学ぶべき所が多いと思います。

また長年にわたって蓄積してきたさまざまな技術をもとに、自動車業界など新たな業種へのアプローチも積極的に進めております。自動車というものは家電に比べると人の命を運ぶという点で、品質管理など格段に厳しいものがあり当社の力も厳しく試されていますが、ひとつひとつハードルをクリアし、新たなアプローチを大切に育てていきたいと考えております。

次の節目の年に向けて、株主のみなさまには 変わらぬご支援をお願いいたします。

当社は2005年に創立55周年を迎えました。これまでの55年間着実に業容を拡大し発展をとげてまいりましたことは、ひとえに株主のみなさまのご支援の賜と深く感謝いたしております。今後とも創立60周年、65周年…さらにそれ以降に続く新しい時代へ向かって、変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

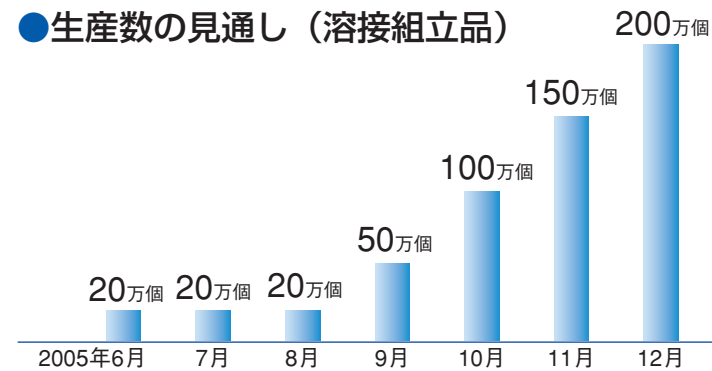


当期からバックライト用 溶接組立品の量産を開始 モリブデン電極 いたしました。

当社の電極溶接組立品は、モリブデン・カップ、モリブデン支持体、ガラス・ビーズおよびデュメット・リード線から構成されます。

モリブデン・カップはバックライトの高輝度・長寿命・低消費電力を実現できる特長があります。また、モリブデンは熱伝導性に優れた材質とされ、その放熱効率の良さから、カップのみならず支持体にもモリブデンを使用することにより、液晶テレビのシステム温度低減に有効と考えられています。(ニッケル電極に比較し20℃～30℃低い) その反面、素材の硬さからこれまで加工や溶接が難しいとされていました。

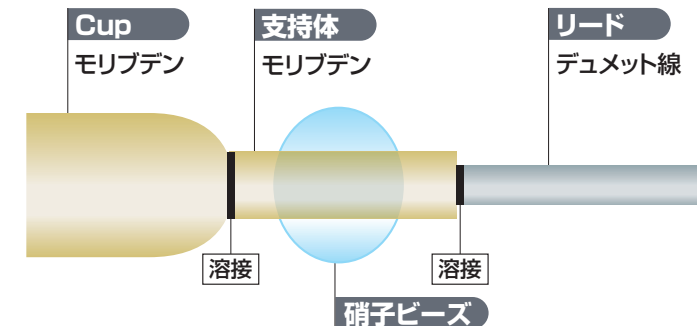
●生産数の見通し（溶接組立品）



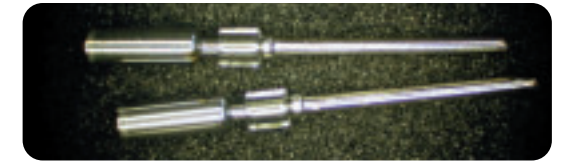
なぜなら電極溶接組立品の生産に際しては、次の3つの高度な技術が必要となるからです。第一にモリブデンの材料をモリブデン・カップにプレス加工する技術、第二にモリブデン支持体にカップとリード線を溶接加工する技術、そして第三にモリブデン支持体にガラスを溶着する技術です。各々の工程は高度な製造技術を必要とされる上で、高い品質管理体制がお客様から要求されます。

当社はこれまでに培ってきた技術力により、これら難易度の高い加工、溶接技術や厳しい市場の要求も全てクリアする、モリブデン電極溶接組立品の一貫量産を可能とした唯一のメーカーとなりました。

●モリブデン電極溶接組立品



バックライト用 モリブデン電極について



液晶ディスプレイの寿命は、部品の中で耐用年数をもっとも短いバックライトで決まると言われております。

バックライトの寿命が液晶ディスプレイの寿命に直結するので、その輝度を制限し寿命を維持してきましたが、液晶テレビ用では輝度が不可欠であるため、寿命と輝度をどのように確保するか大きな課題となっておりました。

以前から、ニッケル電極に比べて長寿命で効率の良い電極としてモリブデン電極が注目されておりましたが、加工が困難とされておりました。

そこで当社は独自の技術を用い、困難とされていたモリブデンの加工を克服し、バックライト用の電極の量産体制確立に成功いたしました。

ニッケル電極に比べて、モリブデンの電極を使用することにより、輝度を制限することなく長寿命が得られることが可能になりました。

